保育者の自然観はいかにして形成されるか？（２）

—熟達した保育者が振り返る新任の頃の自然観—

越中　康治・杉村伸一郎*

Formation Processes of Kindergarten Teachers' Views of Nature (2) :
Experienced Teachers' Reflections on Their Early Career Stage

ETCHU Koji, SUGIMURA Shinichiro*
(Received August 5, 2008)

キーワード：自然観、保育観、保育者の成長

はじめに

保育者は「自然」をどのようにとらえているのであろうか。また、保育者の自然についての見方・考え方は、いかにして形成されるのであろうか。これまで我々は、保育者の自然観（自然についての見方・考え方）とその形成過程を検討すべく、複数名の熟達した保育者を対象として、面接調査を実施してきた。熟達した保育者の「現在の自然観」を検討した越中・杉村（2008）に引き続き、本稿では、熟達した保育者が振り返る「新任の頃の自然観」について、面接結果の報告と分析を行う。

１．問題と目的

幼児教育・保育の分野では、伝統的に「自然」が重視されてきた。幼児期における自然とのかかわりの重要性は、コメニウスをはじめとして、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどの近代教育の思想家によって主張された（野田，2001；高橋・高橋，2007）。本邦においても、今日に至るまで多くの理論家・研究者によって自然の重要性が様々に論じられてきた。その一方で、実際に幼児教育・保育に携わっている保育者自身の自然に対する考え方や思いには、必ずしも関心が向けられてこなかったように思われる。

保育者の多くが自然を重視していることは想像に難くない。例えば、幼稚園教育実習生を対象として質問紙調査を行った杉村・山崎・財満・林・松本・三宅・菅田・落合（2007）は、実習生でも「幼児期における自然体験の重要性」を強く認識していることを明らかにしている。検討すべきは「保育者が自然をどのくらい重視しているか」といった量の問題ではなく、「保育者が自然をいかにとらえているか」という質の問題であるといえよう。

＊広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

保育者の自然のとらえ方は、保育のあり方、さらには子どもたちの育ちと密接な関連を有するものと考えられる。例えば、田尻・鬼頭・石坂（2006）は、質問紙調査によって、「自然とかかわる保育」で育つ力を「保育者の実感」に基づいて検討した結果から、「自然とかかわる保育」に意識的に力を入れている場合には、子どもたちの育ちにポジティブな影響が示される可能性を示唆している。こうしたことからも、保育者が自然についてどのような見方・考え方をしているのかを質的に検討していくことは、保育のあり方や子どもたちの育ちについてより詳細に考える上で極めて重要であるといえよう。

そこで我々は、保育者の自然観（自然についての見方・考え方）について検討を行うために、複数名の熟達した保育者を対象として面接調査を実施してきた。実施にあたっては、保育者の「個人史」に着目した梶田・杉村・後藤・吉田・桐山（1990）のアプローチを参考にした。梶田他（1990）は、保育経験の豊かな保育者に自らの保育の方法と自分の生育史、学生生活、若い頃の保育などを個別に語ってもらい、保育観（保育についての見方・考え方）の形成過程を検討している。その結果、専門職としての保育観は、①まず、学生時代に形成され、②就職後の同僚の影響、③保育者自身の結婚出産、④子どもとの出会いによって変化することなどが見出されている。保育者の自然観もまた、学生時代から熟達するに至るまでに様々な過程を経て形成されると考えられる。それ故、梶田他（1990）のアプローチを踏まえて、自然観をその形成過程も含めてとらえることを試みた。

研究の端緒として、前報となる越中・杉村（2008）では、熟達した保育者の「現在の自然観」を中心に検討を行った。①現在の自然観（自然とはどのようなものか？）、②現在の保育観（保育とはどのようなものか？）、③幼児期の自然体験の重要性（幼児期の自然体験は重要か？）の３つの質問に対する保育者の回答を中心に分析を試みた。その結果、①現在の自然観に関する保育者の語りには、次の２つのタイプが見出された。第１のタイプは「自然の中にいるという感覚」に言及し、自らも自然の一部であるとする語りであった。第２のタイプは「対象・素材としての自然」について、その可変性や意外性などの魅力を語るものであった。これらの語りから、保育者の視点には「人間を含めて自然をとらえる視点」と「自然を対象としてとらえる視点」の２つがある可能性が示唆された。

また、③幼児期の自然体験の重要性に関して、いずれの保育者も重要性を強く認識している点は共通していたが、認識の仕方には２つのタイプがある可能性が示唆された。第１のタイプは「自身の幼児期の実体験に基づく認識」であった。このタイプの保育者は、幼少期に自然の中で経験した感覚、感情、記憶などが、今日保育に従事する中でよみがえってくるという実感を語った。第２のタイプは「自然のもつ教育的な力に基づく認識」であった。このタイプの保育者は、自らの保育観や発達観に言及しつつ自然体験の重要性を教育的な意義から論じた。②現在の保育観に関しては、「子どもが主体である」または「子どもを見る、子どもと向き合う」という「環境を通しての教育」の核となる普遍的な認識が見出されたが、自然のとらえ方に関しては、共通性・差異性を含めてより詳細に検討することが課題として残された。

本稿では、上記を踏まえて、熟達した保育者が振り返る「新任の頃の自然観」について、面接結果の報告と分析を行う。熟達した現在の自然観と新任の頃の自然観との間には、どのような一貫性、あるいは変化が認められるのであろうか。この問題を、保育者自身の回想に基づいて検討する。あわせて「新任の頃の保育観」についても面接の結果を報告し、熟達した保育者が自らの新任時代をいかにとらえているのかを総合的に分析する。

２．方法

２－１　調査協力者

東広島市のＨ幼稚園に勤務する教諭４名（Ａ教諭、Ｂ教諭、Ｃ教諭、Ｄ教諭）、養護教諭１名（Ｅ養護教諭）、副園長１名（Ｆ副園長）を対象として、2007年８月から９月にかけて個別に面接を実施した。なお、面接において、養護教諭と副園長に関しては、新任の頃の自然観・保育観に関する質問を割愛した。したがって、本稿では、養護教諭と副園長を除く、教諭４名の面接結果について報告と分析を行う。調査協力園のＨ幼稚園は、園舎の周りが山で囲まれており、園庭と山とを行き来することが可能な、極めて自然に恵まれた環境にある。また、2006年度からは「森の幼稚園」構想の実現に向けて基盤整備とカリキュラム開発を開始していた（面接実施時は研究実施２年目であった）。

２－２　手続き

保育者の自然観の形成過程を検討すべく、１人２時間程度、個別に面接調査を実施した。面接者は第１著者と第２著者の２名（Ｄ教諭の面接は第１著者のみ）であった。面接の記録は調査協力者の許可を得て録画（ビデオカメラ）と録音（ICレコーダー）によった。なお、本稿の作成にあたっては、結果に記す各教諭の回答の抜粋及び経歴に関する記述について、調査協力者ごとに個別に確認を求め、記述を修正・削除する必要はないかなどの確認を行った上で、公表の了解を得た。

２－３　質問項目

面接調査を実施するにあたっては、予め18の質問項目を準備した。その詳細については、越中・杉村（2008）を参照されたい。本稿では、新任の頃の自然観と保育観に関する次の２つの質問項目について結果の報告と分析を行なう。

①新任の頃の自然観：「先生の新任の頃の自然観はどのようなものでしたか。今の自然観と違いはありますか」

②新任の頃の保育観：「先生の新任の頃の保育観はどのようなものでしたか。今の保育観と違いはありますか」

３．結果

新任の頃の自然観と保育観に関する２つの質問について、各教諭の回答の抜粋を以下に記す。なお、新任の頃の自然観・保育観に先がけて、前報（越中・杉村，2008）において報告した各教諭の経歴と現在の自然観・保育観の概要を記す。

３－１　Ａ教諭の面接結果

３－１－１　Ａ教諭の経歴と現在の自然観・保育観（概要）

Ａ教諭（女性）は保育経験12年（Ｈ幼稚園４年目）であり、面接実施時は３歳児クラスを担任していた。Ａ教諭は、現在の自然観について、「自然を対象としてとらえる視点」から、「計り知れない」「変化していく」「ただ一つのものでも、奥深い感じをいつも受ける」と、「対象・素材としての自然」の魅力に言及していた。自然体験の重要性につい

ては、「（幼少期の泥んこや草むらの経験を）今仕事しながら、『あっ、この感触はあれだった』って思い出して」と、「自身の幼児期の実体験に基づく認識」を示していた。現在の保育観については、「保育者がいろいろ提案していく部分もあるけど、子どもたち自身が遊びをつくり出していく」と、「子どもが主体である」との認識を示していた。

３－１－２　Ａ教諭の新任の頃の自然観

新任の頃はですね、今、田舎育ちと言ったんですけど、ギャップが激しくて。虫がとにかく、まあ、今もあんまり得意じゃないんですけど、触るのが嫌だったので。子どもが虫を捕まえてきて、「先生ほら」みたいな感じで見せられたら、「うーん、かわいいねー」とかって言いながら、「かわいそうだから逃がしておいで」っていう感じで。自分で極力こう、「こっちに持ってこないで」とか「世話をするのはどうせ私になるんだから」みたいなところで。自分の中でかなり拒否、生き物を、虫を拒否していたり。半面、泥んことか水遊びとかは大好きで、自分で「行こう」って言って、自分もずぶぬれになって遊んでたりする面はあったんですけど。子どもが持ってきてるものをすべて受け入れようとする姿勢ではなかったから。「申し訳ないんだけど」というふうに思いました。

３－１－３　Ａ教諭の新任の頃の保育観

そうですね、新任の頃は、とにかくこちらが何か遊びを提案して、「毎日楽しいことをさせてあげないといけない」とか、「子どもが満足して帰らないといけない」とか、「暇な時間があっちゃいけないんだ」とかっていう感じで。毎日、今日はあれしてあれして…。で、「手持ち無沙汰になったらどうしよう」ってパニックになったりはしてたんですよね。その辺が、特にここ（H幼稚園）に来てからは、子どもの時間っていうのは細切れに動いているんではなくて、ゆったりとして動いているもので、その時間っていうのは、もしかしたら１週間のものもあるかもしれないし、２週間スパンのものもあるかもしれないし…。必要に応じて援助していけばいいんだっていうことが、すごく見方が変わった部分かなというのは感じます。

３－２　Ｂ教諭の面接結果

３－２－１　Ｂ教諭の経歴と現在の自然観・保育観（概要）

Ｂ教諭（女性）は保育経験23年（H幼稚園16年目）であり、面接実施時は４歳児クラスを担任していた。Ｂ教諭は、現在の自然観について、「人間を含めて自然をとらえる視点」から、「自分にとって心地よい存在である」「その中にいると心地よい…」と、「自然の中にいるという感覚」に言及していた。自然体験の重要性については、「（幼児期の自然体験を）『快（かい）』と思っていて、大人になったときに『あ、こんなことがあったな』って思い出せる…」と、「自身の幼児期の実体験に基づく認識」を示していた。現在の保育観については、「子どもの育ちを見つけられたらいいな」と、「子どもを見る、子どもと向き合う」という認識を示していた。

３－２－２　Ｂ教諭の新任の頃の自然観

自然は嫌いではなかったんですけれども、実体験が少なかったものですから、すぐに保育とは結びつかないことも多かったですね。〈中略〉実は、あの、最初に勤めていた幼稚

園は、すぐそばに土手があったんですね。だけれども書類を出さないと草すべりにもいけなくて、「遠足なんとか許可願い」って。そういうことが管理職の方がきっちりした方だったので、遠足以外のそういう活動がまったくできなかったんですね。そういうことがあって、自然っていうのがすぐそばにありながら、全くできなくて…。

何ができたかって言ったら、その園庭に大きなけやきの木があったんですね。そのけやきの木の下で遊ぶっていうことはできたんですけど。だから、ああ寂しいなっていう思いがありました。でも、その中では「けやきの木が自然なのよ」みたいな形で。園庭に山があって登ったり、滑り台の…、アスレチックですからね。よく公園にある、鎖をこういう風に登ったりというのがあったんですけど…。その真上に大きなけやきの木があったんですけど、それがやっぱり一番よくって。で、桜の花びらを見つけて、子どもも限られた園庭の中で発見する喜びっていうのはあったかなって思います。

３－２－３　Ｂ教諭の新任の頃の保育観

新任の頃は、よく教えられていたのは、保育は幼稚園からに尽きるって言われていて…。私、大勢の子をみるというのがとても苦手でして。一人の子どもとゆっくりなにかをする方が、自分自身が落ち着いたというのがあって。たくさんの子どもさんと接すると、自分自身が全ての状況に対応…、一人ひとりを把握できない、見きれないんじゃないかっていう不安がいつもあって…。自分が自信もなかったものですから。「リーダーシップをとって子どもを引っ張っていく」っていうか「引っ張っていく」っていう言葉は悪いんですけど、まあそういうね。若い頃はとてもあの、経験もなくて、幼稚園の行事があって、次々とこなしていかなくちゃいけないんだけど、一つひとつ自分の中で納得してるわけじゃないのに、それを子どもにおろしたり…。子どもに無理をさせたくなかったり、活動自体の意味っていうのが自分でもよく分かってなかった…。それがすごく、大勢で、みんなで、チーチーパッパっていうんですかね。私も、大勢の前で何かをするって嫌だったので、幼稚園の先生になりたくてなったわけでもなくて、「ま、しょうがないからなろうかな」って感じでなったので、それは嫌でした。

３－３　Ｃ教諭の面接結果

３－３－１　Ｃ教諭の経歴と現在の自然観・保育観（概要）

Ｃ教諭（女性）は保育経験 27 年（H幼稚園 14 年目）であり、面接実施時は 5 歳児クラスを担任していた。Ｃ教諭は、現在の自然観について、「人間を含めて自然をとらえる視点」から、「自然はいつも私の生活の中にある」「自然の中でほんとに生かされてる」と、「自然の中にいるという感覚」に言及していた。自然体験の重要性については、「自然の中でずっと過ごしてきた記憶があるので」「それはとても楽しいことだったので」と、「自身の幼児期の実体験に基づく認識」を示していた。現在の保育観については、「（子どもと）人として向き合っていくひとつの、楽しくもあり苦しい仕事ですね」と、「子どもを見る、子どもと向き合う」という認識を示していた。

３－３－２　Ｃ教諭の新任の頃の自然観

そうですね、自然観っていうか、きれいなもの、きれいな自然は新任の頃好きだったっていうか。花を咲かせたり、保育室をいろいろ美しい花で、テーブルフラワーなんかで整

えたり、自然物をいろいろ持ち込んだりして、子どもたちと一緒にね、自然を感じることは新任の頃からしてたんですけど。それはとても楽しいし、美しいし、心地よいことだったんですけど…。新任の頃、実は、女の子ですから虫が大っ嫌いだったんですね。だからあの、子どもがいろいろ持ち込みますし…。あの、カブトムシですとか、持ち込むと飼育をしなくちゃいけないんですよね。子どもだけではできないので。その飼育をすることがとっても苦痛でした。だからカブトムシなんてどうやってつかんだらいいか分からないし、えさを代えたりするのも臭いますしね、飼育動物を世話するのがすごく嫌でした。「何でこんなことをしなくちゃいけないんだろう」って思いながら。「まあ、保育者だから仕方なくしなくちゃいけないな」って思いながら。嫌々ながら、飼育動物に関しては、ほとんど嫌々ながらやってましたね。今はそうではないですけど、新任の頃はそうでした。

３－３－３　Ｃ教諭の新任の頃の保育観

新任の頃はですね、実はそのときはH市の保育園でしたから、保育園で子どもがまだ、乳児じゃなくて幼児をもってましたから。4 歳児をもってたんですけど、「うわぁ、子どもと一緒に遊んでお給料がもらえるなんて、なんていい仕事だろう」って、その頃は思ってました。ほんとにあの、責任がないというか、「自分の言動自体が子どもにどんなに影響を与える」とか、そうようなこと全然考えないで、ただ「楽しく一緒に遊んでたらお給料がもらえるんだ」「こんないい仕事はないな、楽な仕事はないな」ってぐらいに思ってました。飼育動物とかね、ああいう世話を除いては、思っておりました、はい。非常に無責任ですね。

３－４　Ｄ教諭の面接結果

３－４－１　Ｄ教諭の経歴と現在の自然観・保育観（概要）

Ｄ教諭（男性）は保育経験 16 年（H幼稚園 12 年目）であり、面接実施時は大学院にて内地研修員として 1 年間の研修中であった。Ｄ教諭は、現在の自然観について、「人間を含めて自然をとらえる視点」から、「『自然の中に自分はいる』っていうのが一番の感覚ですかね」「人間も動物であり自然の一部であるっていうことから離れすぎていってるんじゃないかな」と、「自然の中にいるという感覚」に言及していた。自然体験の重要性については、「やっぱり自然っていうのは法則」「（発達には）自ずからそうなっていくっていう道筋がある」としつつ、「（自然の中にいると）その子の持っているものが発揮されやすいと思う」として、「自然のもつ教育的な力に基づく認識」を示していた。現在の保育観については、「本来の人間らしい生活っていうのかな、幼児期だったら遊びだったりとかね、自分の力、いろいろ出してみたり」と、「子どもが主体である」との認識を示していた。

３－４－２　Ｄ教諭の新任の頃の自然観・保育観

新任の頃は、少なくとも今みたいな言語化はしてなかったですね。大事とも、別に、特には言ってなかったかもしれないけど…。まあ、外に出たりとか、やっぱりそういう中に行くのはすごい好きでしたね。で、まあ、それがなんでかなぁって思うと、自分自身がすごくワクワクするっていうかね、楽しいっていうのもあるし、子どももやっぱりすごくのびのびしてるし、だからそういう姿だっていう風に感じてたのが、ひとつ絶対あると思う

んですよね。だからなるべく時間を作っちゃあ、外に。

最初に勤めた幼稚園とかは、ものすごく、ある意味「設定保育がちがち」の幼稚園で、時間があんまりなかったんですけど。そん中で自分で「あっ、こうやって時間作れるんだなぁ」って分かったら、「時間を作って外に出るっていう風なことしてたなぁ」っていうのは、今思い出しますね。だから、大事っていうか本来的に何かそういうものを感じてたのは事実、その頃からあるんだろうなと思います。〈中略〉

ただ、昔は保育と自然はつなげてはなかったですね、昔は。そういう意味では違うって言ったら違うかもしれないけど、「自然は好き」で「保育は保育」っていう。どっちかっていうとね…、感じで。そん中で「一番自分の好きな時間は自然の中にいる時間」「子どもも多分、一番好きな時間」っていう感じだったんで。で、大事さって言う意味では変わってないっていうか、まあ。うーん、好きとかね、そういう自分の中での感覚は変わってないと思うけど、保育観の中に与える影響は変わったんでしょうね。「変わった」っていうか「意味づいてきた」っていうか。言語化っていうだけよりも意味づけみたいなものの深まりっていうかね、（それ）は、違ってきたんじゃないかなとは思いますね。

4．考察

ここまで本稿では、熟達した保育者が語る「新任の頃の自然観・保育観」を報告してきた。「新任の頃の保育観」は、前報（越中・杉村, 2008）において示した「現在の保育観」とは対照的なものであった。「子どもたち自身が遊びをつくり出していく」ことを保育ととらえているA教諭は、新任の頃「とにかくこちらが何か遊びを提案」しなければならないと感じていた。また、「子どもの育ちを見つけ」ることを保育ととらえているB教諭も、新任の頃は「一人ひとりを把握できない、見きれないんじゃないか」という不安を感じていた。さらに、保育を「（子どもと）人として向き合っていくひとつの、楽しくもあり苦しい仕事」ととらえているC教諭も、新任の頃は、単に「こんないい仕事はないな、楽な仕事はないな」と思っていたと語った。これらの語りからも、熟達した保育者は、現在の保育観と新任の頃の保育観とを対照的なものとみなす傾向にあるといえる。

「新任の頃の自然観」についての語りにおいても同様に、熟達した保育者は「現在の自然観」との相違を語った。「新任の頃の自然観」についての語りは2つのタイプに大別することができよう。A教諭とC教諭の語り、B教諭とD教諭の語りには、その内容と構造にそれぞれ共通性があるものと見てとれる。まず、A教諭とC教諭の語りは、3 つの要素から構成されていると考えられる。第1は「嫌いな自然」についての語りである。A教諭は「虫がとにかく、まあ、今もあんまり得意じゃないんですけど、触るのが嫌だった」と語り、C教諭は「新任の頃、実は、女の子ですから虫が大っ嫌いだったんですね」と語った。第2は「好きな自然」についての語りである。A教諭は「（虫が嫌いな）半面、泥んことか水遊びとかは大好きで、自分で『行こう』って言って、自分もずぶぬれになって遊んで」、C教諭は「（花を咲かせるなどの）きれいな自然は新任の頃好きだった」と語った。第3は「自然を全体として受容することの難しさ」についての語りである。A教諭は「子どもが持ってきてるものをすべて受け入れようとする姿勢ではなかった」と当時を振り返り、C教諭は、動物の世話について「何でこんなことをしなくちゃいけないんだろう」「まあ、保育者だから仕方なくしなくちゃいけないな」と思っていたことを明かしてくれた。

Ｂ教諭とＤ教諭の語りもまた、3つの要素から構成されていると考えられる。第1は「園からの制限」についての語りである。Ｂ教諭は「最初に勤めていた幼稚園は、すぐそばに土手があったんですね。だけれども書類を出さないと草すべりにもいけなくて」、Ｄ教諭は「最初に勤めた幼稚園とかは、ものすごく、ある意味『設定保育がちがち』の幼稚園で、時間があんまりなかった」と新任の頃の職場を振り返った。第2は「機会を作り出す努力」についての語りである。Ｂ教諭は「何ができたかって言ったら、その園庭に大きなけやきの木があったんですね。そのけやきの木の下で遊ぶっていうことはできたんですけど」、Ｄ教諭は「『時間を作って外に出るっていう風なことしてたなぁ』っていうのは、今思い出します」と、制限の中でも自然とかかわろうとしてきた経験を語った。第3は「自然と保育をつなぐことの難しさ」についての語りである。Ｂ教諭は「自然は嫌いではなかったんですけれども、実体験が少なかったものですから、すぐに保育とは結びつかないことも多かった」と語り、Ｄ教諭も「新任の頃は、少なくとも今みたいな言語化はしてなかった」「昔は保育と自然はつなげてはなかった」と語った。

熟達した保育者の「新任の頃の自然観」からは、保育者を目指す学生の自然観（越中・小津，2008）との共通性を多く見出すことができる。越中・小津（2008）は、幼稚園教諭免許状の取得をめざす学生を対象として、本研究と同様に、自然観に関する自由記述を求めた。その結果、学生は「自然とはどのようなものですか？」という問いに対して、山川草木などに言及しつつ、自然を人間とは区別された客体として記述する傾向にあった。熟達した保育者のように自然を「人間や人間的諸事象をもふくめたすべてのものの本来のあり方、おのずからあるがままのあり方」（木田，2004，p. 11）としてとらえている様子は見受けられなかった。また、学生は、自然について「好き」「嫌い」あるいは「癒し」などの感情的側面から記述する傾向にあった。「好きな自然」と「嫌いな自然」があり、「昆虫は苦手です」「カエルだけは好きになれません」などと「自然を全体として受容することの難しさ」を感じていると記述した学生も多かった。以上のことから、学生や新任の保育者は、「自然が好き」「幼児期の自然体験は大切」という思いを抱きつつも、概して「自然を全体として受容することの難しさ」や「自然と保育をつなぐことの難しさ」を感じている可能性が示唆される。

倉橋惣三（1918）は、教育者が自然と一致することの重要性を説く中で、「真に自然と一致し得ることは難しいことであるが、自然を愛するとか、自然に趣味をもつとかいう位の軽い意味でもいい」（p. 22）と述べている。学生や新任の保育者にとっては「自然が好き」「幼児期の自然体験は重要」という思いをもつことが大切であり、まずはそれだけでよいのかも知れない。しかし、保育者として熟達・成長する過程の中では、「自然を全体として受容すること」と「自然と保育とを結びつけること」が求められるのではないだろうか。こうした保育者の熟達・成長は、自然に対する認識の転換によってもたらされるものと推察される。すなわち、「自然を人間とは区別される客体として、好き・嫌いなどの感情的側面からとらえる段階」から「人間を含めて自然をとらえ、自然の根幹にある『すべてのものの本来のあり方』を認識する段階」へと移行することによって、保育者の大きな成長がもたらされるのではないだろうか。こうした問題を検証していく上でも、今後の研究では、熟達した保育者自身が、自然に関する認識の転換・変容の契機をどのようにとらえているかについて検討を続ける必要がある。

謝辞

本研究にご協力を賜りました幼稚園の諸先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

越中康治・小津草太郎（2008）. 幼稚園教諭をめざす学生の自然観（１）　山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 15-25.

越中康治・杉村伸一郎（2008）. 保育者の自然観はいかにして形成されるか？（１）―「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観―　幼年教育研究年報（広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設）, 30, 49-59.

梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子（1990）. 保育観の形成過程に関する事例研究　名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 141-162.

木田　元（2004）. 自然　木田　元（編）　哲学キーワード辞典　新書館　pp. 10-13.

倉橋惣三（1918/1965）. 自然との一致　坂元彦太郎・及川ふみ・津守　真（編）　倉橋惣三選集　第二巻　フレーベル館 pp. 22-23.

野田敦敬（2001）. 初等教育における自然体験の重要性　愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 4, 79-85.

杉村伸一郎・山崎　晃・財満由美子・林よし恵・松本信吾・三宅瑞穂・菅田直江・落合さゆり（2007）. 幼児期における自然体験の効果に関する実証的研究（１）―教育実習生からみた自然体験―　広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 35, 251-257.

田尻由美子・鬼頭弘子・石坂考喜（2006）.「自然とかかわる保育」で育つ力についての実証的研究（その３）　日本保育学会第 59 回大会研究論文集, 582-583.

高橋多美子・高橋敏之（2007）. 幼少期における自然体験の重要性の再検討と教育的意義　理科教育研究, 48 (1), 51-61.